

民衆は何を思っていたのか

情報工学2年 小田 元

トゥーランドット姫が謎かけを続けることで、求婚をするも失敗して処刑される皇子が増え、国内外に大きな混乱を招いたことが予想される。各国の皇子が次々と処刑されていく異常な事態に、中国皇帝アルトゥムや三人の大臣ピン、パン、ポンは姫に嫌気がさし処刑はもうたくさんだと飽き飽きしている。この心境は劇中のセリフの端々から察することができる。だがこの異常事態に翻弄されていた者がさらに大勢いる。事あるごとに劇中のシーンを取り囲む民衆である。私はトゥーランドット姫を原因とした一連の事態に流されていく民衆も、作品を盛り上げていると感じた。そして民衆はどのような心情であったのか考えたいと思う。

まず第1幕、ペルシアの皇子が姿を現すまで民衆からは処刑はまだかと処刑人プー・ティン・パオを呼び、残忍な催促をする声が聞こえてくる。これは日々の単調で貧しい暮らしに刺激がほしかった者、またその後の民衆の行動からわかるが処刑される皇子が身に着けている金品が目当ての者、さらには処刑の合図をする姫見たさの者、の三種類ほどの人が少なくともいたのだと思う。しかし何度も繰り返されている処刑の一回に過ぎないことから民衆も処刑に飽きているとすると、なんとか稼ごうと金品を目当てにしている者がほとんどなのかもしれない。ペルシアの皇子が現れてからは、死の間際だというのに凜々しい皇子の姿に同情する者が出てくるほか、セリフにはなかったが、私は純粋に国の未来を憂いて嘆いたり怒ったりしている国民がいてもおかしくはないと思う。

次に第2幕第2場、城内の大広間に集まる民衆について、まず不思議に思ったのが民衆を城内に大勢入れていたことである。皇族がいる城の中に身分が高くないであろう人が簡単に入れてもらえるとは思えない。これは姫が誰のものにもならないという意志をより多くの人に見せしめるために民衆を入れたものと考えられる。考察の対象を民衆に戻すと、カラフが姫の問いかけに一問答えるごとに沸き立つ民衆は、最後の一問をカラフが悩んでいるときまで「がんばれあと一問だ」と、応援している。おそらく野次馬として来た者と、国の行く先を案ずる者が大半だろう。三問目正解時に民衆が喜ぶのは、長く続いた異常な国の状態から解放されることを考えれば当然として、言い訳を続ける姫に辟易した者は多かったと思う。

最後に第3幕だが、民衆はこの作品の中で最も振り回されたと感じる。カラフの名を聞き出すために姫は民衆に寝ることを許さず、名を日の出までに聞き

出せなければ民を責め殺すという。民衆はこれでまともな国へ戻るのだと安心した矢先であるから落胆は余計に大きかったと思われる。そして理不尽に殺されてしまうかもしれない恐怖と、命令を下した姫とその原因であるカラフへの強い怒りを持っただろう。中には先のシーンでカラフを大いに讃えていた者もいたであろうから、2幕から3幕にかけての民衆の心情の変化は本当に激しいものだったと思う。その後カラフを想い自害したリューを見て許してほしいと死を悼む民衆だったが、私は「口を割らないまま死んでしまった。惜しいことをした。」と、言う情のない民衆の存在も自分の命がかかっているとなれば否定できないと思う。最終的に姫はカラフへの愛に目覚め民衆も死を免れるわけだが、この一晩の心労は計り知れない。だからこそ安堵感と喜びも大きかっただろう。

民衆の心情を考えてきたが、やはり自分ならばどう思うのかと置き換えることは多かった。また民衆が登場人物たちの言動に毎回揺さぶられることで事態の重大さがより伝わってきたと思う。